

【旭・太田校区】  
学校適正化に向けた校区懇談会  
(第2回)



# 第1回懇談会でいただいたご質問について

- ◆小中一貫校における、小学生・中学生それぞれにとってのメリット・デメリットをもう少し整理して、教えて欲しい。



2~4ページの資料でご説明します。

# 施設一体型小中一貫校(小中一貫教育)の利点と課題について

## 【小・中学生に共通する利点と課題】

<b>利点</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆中学校区における「めざす子ども像」の共有により、同じ方向性をもって教育を進められる</li><li>◆小・中学校教員間の共通理解を醸成した上で子どもたちを指導し、見守ることができる</li></ul>
<b>課題</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆休み時間や授業中、放課後の活動場所が限られる可能性がある</li><li>◆小・中間で授業時間が異なるため、チャイムの鳴らし方に工夫が必要</li></ul>

## 【小学生にとっての利点と課題】

<b>利点</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆小学校高学年から教科担任制を導入することで、専門的な学習による学力向上に期待できる</li><li>◆普段から中学生と交流することで、先輩に憧れる心を醸成しやすい</li><li>◆中学校進学に対する不安の解消により、期待感・適応力を高めることができる</li></ul>
<b>課題</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆小学校6年生でリーダーシップを発揮する機会が少なくなりやすい</li><li>◆中学生のテスト期間には休み時間の遊びに制限が生じやすい</li></ul>

## 【中学生にとっての利点と課題】

<b>利点</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆普段から小学生と交流することで、後輩を優しく見守る心を醸成しやすい</li><li>◆自身の小学校時代を知る教員が身近にすることで、安心して相談等を行える</li></ul>
<b>課題</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>◆進学による自覚の芽生えが薄れてしまう可能性がある</li></ul>

# 施設一体型小中一貫校(小中一貫教育)の利点と課題について

## 【先進事例での課題解消策など】

### ◆休み時間や授業中、放課後の活動場所が限られる可能性がある

☆体格差や学年区切りに応じた校舎整備を図るとともに、屋外活動では低学年用の遊具スペースや、サブグラウンドを整備し、動線の区別や活動場所の確保を図る。

### ◆小・中間で授業時間が異なるため、チャイムの鳴らし方に工夫が必要

☆【事例】休憩時間を調整し、授業開始時間を小中で合わせる。  
(小学生は15分休憩、中学生は10分休憩、授業終了時はノーチャイム)

### ◆中学生のテスト期間には休み時間の遊びに制限が生じやすい

☆【事例】テストの妨げにならない過ごし方を伝え、自身が中学生になった際の心構えを身につけるきっかけとする。  
☆【事例】普通教室を小・中別棟式で整備する。

### ◆小学校6年生でリーダーシップを発揮する機会が少なくなりやすい

### ◆進学による自覚の芽生えが薄れてしまう可能性がある

☆【事例】普段からの異学年交流により、6年生という時期に限らずリーダー性を育む。  
☆【事例】4年生の1/2成人式、6年生のステージ進級式、7年生の立志式等の取組により、学年の区切りを意識させる。

# 施設一体型小中一貫校の特徴について

## 【施設一体型】でしかできないこと or 容易にできること

### 学校運営の視点

- ◆職員組織・職員室が一体化できる
- ◆小・中合同の授業研究会や交流・会議などがより容易に開催できる  
⇒小・中教員間での日々の交流や連携が行いやすい  
⇒小・中教員間での共通理解を醸成しやすい

### 教育活動の視点

- ◆小学生児童と中学生生徒による日常的な交流ができる  
⇒後輩を優しく見守る・先輩に憧れる心、自尊感情を醸成しやすい
- ◆小学校高学年での教科担任制や部活動参加など、中学校生活がより容易に体験できる

		小中一貫教育の総合的な成果				合計	スコア	
		大きくある	ある	あまりない	ほとんどない			
施設 類型	施設一体型	度数	37	101	4	0	142	3.23
		%	26.1%	71.1%	2.8%	0.0%	100.0%	
	施設隣接型	度数	6	39	4	1	50	3.00
		%	12.0%	78.0%	8.0%	2.0%	100.0%	
	施設分離型 (一対一)	度数	21	131	19	2	173	2.99
		%	12.1%	75.7%	11.0%	1.2%	100.0%	
	施設分離型 (一対多)	度数	43	555	98	4	700	2.91
		%	6.1%	79.3%	14.0%	0.6%	100.0%	
	その他	度数	5	44	8	0	57	2.95
		%	8.8%	77.2%	14.0%	0.0%	100.0%	
合計	度数	112	870	133	7	1,122	2.97	
	%	10.0%	77.5%	11.9%	0.6%	100.0%		

文部科学省が平成26年に実施した「小中一貫教育等についての実態調査」においても、【施設一体型】において成果がより大きいと示されている

# 第1回懇談会でいただいた主なご意見について

- ◆適正化の取組自体には一定の理解を示すが、子どもたちの人間関係への影響を考えると、在学中の転校は不安。中学校進学時に新たな学校へ通うということでも同様。
- ◆通学できる学校がある(旭・太田小学校、土生中学校は残る)のに、一部地域に住む子どもだけ通学区域を見直されるというのは疑問。見直される人数も多くないので尚更。
- ◆葛城中学校区のみで再編し、旭・太田校区の通学区域は変更しないということではダメか。
- ◆仮に調整区域として学校を選択できるようになったとしても、時限的な話ではないのか。
- ◆神須屋町の通学区域が4つの小学校に分かれていることを課題に挙げているが、土生町では土生新田の通学区域を変更する(分かれる)案となっており、矛盾するのでは。
- ◆子どもたちのことを考えると、通学距離の近さが大切。

これらを踏まえ、教育委員会として考えられる方向性(案)を検討しました

# ご意見を踏まえた方向性(案)について

## 調整区域の設定(案)

☆現実実施計画(案)で、通学区域の見直し対象としている地域については、『従来校と、新たな(仮称)葛城小中一貫校のいずれも選択できる調整区域』の設定に向けて検討します。

Q.この案であれば、在学中に転校が生じることはないのか？

A.従来通学していた学校へそのまま通学することが可能です。

Q.調整区域の設定は時限的なものなのか？

A.具体的な時限を設けて設定するものではありません。  
ただし、今後の住居表示実施状況等によっては、再度検討を行う可能性もあります。